『敬宇日乗』における中村敬宇と井上圓了

小泉 仰
koizumi takashi

国会図書館分院静嘉堂文庫所蔵の中村敬宇自筆の日記『敬宇日乗』の中に、敬宇は東京大学において井上圓了に漢学を教えていたことを記述している。私は本小論において『敬宇日乗』の中で記述された東京大学において教授と学生として出会った中村敬宇と井上圓了との交わりを以下に述べることにする。

中村敬宇は几帳面な人物で割合清書に近い漢文か書き下し文で日記を書いているが、ときどき判読しにくい文字で記した部分もあり、以下、筆者が判読した限りで敬宇が書いた記事を材料にして、敬宇と圓了の間にどのような交わりがあったかをここに記しておきたい。

中村敬宇は、二条城交番同心中村武兵衛重一の長男として天保三年（一八三一）江戸に生まれ、幼名を釧太郎といい、後に敬輔、諱を正直、敬宇と号した。幼い時から漢学を学び、嘉永元年（一八四八）昌平坂学問所に入り、当時の学問所の御儒者であった佐藤一斎に学んで朱子学の造詣を深め、また陽朱陰明(1)とも言われた佐藤一斎の影響のせいか陽明学にも関心を深めていた。さらに密かに蘭学、英学をも学んだと言う。安政二年（一八五五）学問所教授方出役を命ぜられ、一時甲府の徽典館学頭として甲府に赴任した後、江戸に戻って御儒者勤向見習に任ぜられた。文久二年（一八六二）、三十一歳の若さで昌平坂学問所の御儒者となり、名実ともに江戸末

期の朱子学者を代表する人物の一人に数えられたのである。

彼が安政元年、二十三歳のとき書いた「洋学の禁よろしく除くべし(2)」という小論で「天地人に通ず、これを儒という、外蛮の事を譜るし、外蛮の情を審らかにするは、みな学者の分内のことにして、まさになすべきの事なり」と主張した。徳川幕府に英国留学生派遣の企てがあったとき、彼は文法の学、論理の学、人倫の学、政事の学、律法の学を西洋で学ばなければならない所以を主張して、川路太郎と共に留学生十二名を連れて、留学生取締役としてロンドンに滞在し、慶應二年（一八六六）十二月から明治元年（一八六八）四月まで英学を学んだ。ここでキリスト教が世界最大にして最強の英国の政治経済・軍事・文化の興隆の根幹になっていると見たのである。

帰国後、幕府の崩壊のために静岡に移住して静岡学問所教授を勤めたが、ここで福沢諭吉の『学問のすゝめ』と並び称される当時のベスト・セラーになったサムエル・スマイルズ著『西国立志編』の翻訳を行い、明治四年に出版した。さらにJ・S・ミルの『自由之理』を明治五年に翻訳出版して、明治初期に西洋文明の精神・思想の一側面を導入して新しい潮流を作り上げる指導者の一人となった。

明治五年に明治政府に呼び出されて、文部省翻訳御用を勤めた。東京に出ると共に、江戸川沿いの大曲に居を定めた。明治六年に森有礼、福沢諭吉、西村茂樹、西周、杉亨二、加藤弘之らと協議して、日本初の学会と言うべき明六社を明治七年に正式に発足させて、日本の学問の基礎を造る役割を果たした一人となったのである。また明治六年二月、自宅の一部を開放して私塾「同人社」を創立し、明治の青年男女の教育に専念した。同人社は慶應義塾と攻玉社と合わせて当時の三大私塾と言われたものである。さらに敬宇は訓盲院の建設にも尽力した人物である。

ところで、中村敬宇が東京大学で教え始めたのは、明治十年（一八七七）のことであり、彼が四十六歳の時で東京大学文学部嘱託という身分を与えられた。次いで明治十四年八月十一日に東京大学教授に任ぜられ、漢学を担当することになった。明治十五年五月には東京大学古典講習科が設置されると同時に、ここで漢学科授業を担当することになったのである。

さらに明治十七年九月六日、敬宇が五十三歳のとき、同大学の勅任教授となり、明治十九年二月、東京大学教授から元老員議官に任ぜられて、大学をやめることになるまで敬宇は大学で漢学を教授していた。明治二十一年文学博士の学位を受け、翌年には女子高等師範学校長となり、同年貴族院議員に勅撰されたが、明治二十四年六月七日長逝した(3)。

一方、井上圓了は、明治十四年に東京大学文学部哲学科に入学し、明治十七年（一八八四）に「哲学会」を創設して学会活動を行っており、明治十八年七月に東京大学を卒業して十月に文学士の称号を得ている。そこで中村敬宇と井上圓了が東京大学で交わる可能性があったのは、明治十四年から明治十八年までであるが、『敬宇日乗』に記載された二人の関係は、もっと短い。彼らの関係を見る前に、まず私が見た『敬宇日乗』を簡単に触れておきたい。

静嘉堂文庫に所蔵されている『敬宇日乗』は、『敬宇日乗一　明治九年』、『敬宇日乗二　明治十五年・十六年まで』、さらに『敬宇日乗三　明治十五年日乗　七月二十四日より十六年一月二至ル』、『敬宇日乗四　明治十八年日乗』、『敬宇日乗五　明治十九年日録』、『敬宇日乗六　明治二十年日録』、『敬宇日乗七　明治二十一年日記』、及び『敬宇日乗八　明治十七年九月六日ヨリ』の八冊である。最後の『敬宇日乗八』は明治十七年であるから、本来時間的に言えば『敬宇日乗四』でなければならないが、静嘉堂文庫所蔵の自筆本では上記のような表記にな

っている。

ところで、『敬宇日乗』に井上圓了の名前が出てくるのは、明治十七年と明治十八年の日乗においてである。そこで明治十七年の『敬宇日乗』の中から敬宇が東京大学に出勤乃至欠勤した事情を記述したところと、井上圓了の名前が出てくる箇所を以下に抜き書きしてみることにしよう。但し『敬宇日乗』では「井上円了」と略記されている。

『敬宇日乗八』

明治十七年甲申

九月六日　天晴　今日午前十時礼服着用　太政官ニ出所致候処　勅任ニ被進　自今年俸千八百円下賜候旨拝命ス

九月十日　大学ニ出所ス試験品等を定む(4)

月　十五日　大学ニ出勤ス漢書課第六級生ニ十一名出席ス下読ニ新帰ニテ未為向多キ外ニ見受ルニ付休ム

火　十六日　大学ニ出勤ス

＊井上円了ソノ親病アル由ニテ未ダ帰校セズ、故ニ休ム(5)

水　十七日　大学ニ出勤ス易坤ノ文言スム　論語ハ書物ヲ未ニ受取ニモノアルニ由リ休ム

木　十八日　大学ニ至ル　孟子輪講第一期生始マル

金　十九日　大学ニ至ル　論語孟子輪講

土　二十日　大学ニ至ル　易輪講

月　二十二日　大学ニ出ル　易論語
水　二十四日　大学　易論孟　此日重野君大学教授ニ兼任
木　二十五日　大学　孟子
金　二十六日　大学　論語孟子
月　二十九日　大学
三十日　御用召ニテ太政官ニ参ル

叙正五位　従五位
中村正直

ソレヨリ大学ニ出ル午後二時ヨリ集議アル由ノ処差掛リ所労ニテ断ヲ出ス

十七年十月
一日　水　大学　易　泰彖(タン)伝　論語　南宮括
二日　木　大学　孟子牽牛章
土　三日　一時夢覚テ　大学ヨリ帰リ本傳寺ニ参詣ス
大学　易　同人大有　彖象
六日　月　大学ニ出勤ス　易　謙豫　彖象傳　論語桓公公子糾
七日　火　大学出勤ス　易論語孟子輪講　交隣国章
水　九日　大学ニ出勤　孟子輪講
十日　今日ヨリ十三日マデ向四日ノ間所労不参届差出ス

十四日　＊大学　井上円了課乾卦
十六日　大学　孟子
十八日　大学出勤　易
二十五日　大学卒業式
月　二十日　大学　易　論語
火　二十一日　大学　支那哲学
水　二十二日　大学　易論語孟子
二十三日　大学出勤　孟子輪講
二十五日　十時十分マデニ大学ニ参ル　大学に位授与式ニ出ル
二十七日　大学ニ出勤ス　易論語
火　二十八日＊大学ニ出勤ス　井上円了ノ易課
水　二十九日　今日ヨリ向三日ケ間所労ニ付不参届ヲ大学ニ出ス
十一月四日　＊大学　井上円了課
十一月五日　大学　易上経　彖象スム　論語三スム　孟子一スム
六日　大学　孟子輪講
八日　大学　易　咸　恒
十日　大学　易
十一日＊井上円了　訟　比　易課

十二日　今十二日ヨリ来ル十五日迄病気引
十七日　今日法律学ヲ開講
十八日＊大学ニ出勤ス　第四年生井上氏ノ課ナリ
十九日　大学　易　彖象　家人　睽卦
二十日　大学　孟子課
二十一日　大学孟子課
二十二日　大学第六期生　小試験為休
二十四日　大学出勤ス
二十六日　論語小試験
二十八日　大学第一期生試験
二十九日　大学小試験ニ付休

十二月一日　大学　易　蹇　解彖象　論語顔淵問為邦以下数章
二日　＊大学　井上円了　易小蓄　彖象
三日　大学ニ出勤　孟子　以力仮仁之覇
四日　大学ニ出勤　孟子　人皆有不忍人之心
五日　微恙　大学ニ今日明日不参届ヲ差出ス
八日　大学　夬　姤　彖象
九日　＊大学　井上円了　履泰

十日　大学　四時間
十一日　大学孟子輪講
十二日　大学論語孟子輪講出席
十三日　土曜　大学　易　困　井　彖象
十五日　是日気力不健頭重故不至大学及学士院
十六日　＊井上円了試験
十七日　水　大学
十八日　木　大学
十九日　金　大学　青山氏ノ試験
二十日　暁読信解品　是日不労断ヲ大学ニ出ス
二十二日　大学出勤
二十四日　大学出勤　生徒ノ文ヲ點刪ス

『敬宇日乗四』

明治十八年

一月　十二日　大学　繫辞傳
二十五日　大学　天一地二
三十一日　大学
二月　二日　大学　易

二十日　大学

是日哲学会ニ出ル「我ハ造物主アル事ヲ信ズ」ヲ演説ス

二十一日　大学

三月　一日

申報　明治十六年九月ヨリ同十七年七月迄

東京大学教授　中村正直

和漢文学第四年生ニ属スル分

コノ学年ニ於テ和漢文学第四年生棚橋一郎ニ教課ヲ授ケ用フル所ノ書ハ詩経老子列子ナリソノ進歩著シク余ヲシテ満足ナサシメタリ卒業論文ハ進化論ナリカクノ如キ文ハ漢洋ヲ兼学スル生徒ニ非レバ作ル能ハザルヲ知リ大ニ望ヲ将来ニ属スルニ足ル

漢書課ニ属スル分

コノ時限ノ間第六期生ニ余ガ課スル所ノ書ハ易経論語ナリ〈其間ニ文章ヲ作ラシム諸生徒ハ端正勤勉ニシテコノ課ヲ設ケラレシ〉十六月〈年？〉九月ヨリ新募〈生徒〉第一期ニ余ガ課スル所ノ書ハ孟子ナリコノ二種ノ生徒何レモ皆勤勉ニシテ怠ラズ故ニ〈善ク問難スルガ余ヲシテ十分ニ準備ヲ為サザレバ教場ニ出ルコト能ハザラシメリ〉余ヲシテ問難ノ間ニ益ヲ得ル事ヲ覚ヘシメタリ(6)

三月　二日　＊月曜日　明日火曜日ヨリ井上円了ハ易ノ課業ヲ止メ卒業論文ノ支度ニ従事ストテコノ前火曜日ニ断リヲ申出ルニ付為念教務課ニ申シ置ク

四日　大学出勤
五日　大学出勤
六日　大学出勤　試験委員申合ニ付文部省ニ出ル
土　七日　大学出勤
日　八日　問題ヲ考フ
九日　大学　易繫辞下　九卦　論語子張ニカカル
水　十一日　大学　易論孟三課
木　十二日　大学　論語第一期　放於利多怨(7)
金　十三日　大学
土　十四日　大学　易繫辞下伝スム
土　二十一日　大学　第一期生　試験
日　二十二日　朝血ヲ吐ク池田謙斎ヲタノム
月　二十三日　八百吉大学ト文部省ニ往キ出勤ノ事ヲタノム
二十四日　来ル三十日迄所労届ヲ出ス
火　三十一日　大学ニ追テ又来月七日迄不参届ヲ出ス…
＊教務掛ニ井上円了ノ点数ヲヤル
火　四月七日
診断書

正五位

中村正直

右ハ喀血症ニ罹リ引キ籠リ療養寛容之段致診断候也

明治十八年四月七日

神田区駿河台北甲賀町九番地

池田謙斎　印

水　四月八日　今日大学ニ引籠届診断書ヲ差出ス　庶務課ニ出テ添ヘ引籠制限ハ本月一パイノ見込ノ事ヲイヒヤル

金　五月一日　今日病後始テ出勤ス　論語孟子輪講

土　二日　易説卦伝

六日　今日ヨリ九日迄所労届ヲ大学へ差出ス

月　十一日　大学出勤　易　説卦

月　十八日　大学ニ今日不参届出ス

二十日　大学

二十一日　大学

二十二日　大学

二十三日　昨夜肩ハリテ大ニ苦シム二十五日迄三日ノ間不参届ヲ出ス

二十五日　月曜日

東京大学植物園に於て本学外国教師へ午餐饗応致すに付而午後一時迄ニ参集可為候也

明治十八年五月十六日　　東京大学

水　二十七日　大学出勤
木　二十八日　大学出勤
金　二十九日　大学出勤
土　三十日　大学断
六月　一日　大学　易序卦伝下
三日　大学　論語輪講　是日卒業
四日　今明日所労断ヲ出ス
六日　易雑卦　是日周易卒業
十日　大学孟子離婁下読　今日ヨリ休業ニスル
十八日　大学漢文課第一年生孟子試験
十九日　同上　論語試験
二十二日＊井上円了易試験
二十三日　大学第三年生試験論語
二十四日　大学易試験
七月　八日　＊大学ニ参ル　井上円了卒業証書ニ調印ス

九月　十日　大学ニ参ル
火　十五日　大学　本科生周易ト定ム
十六日　大学　第二年生孟子輪講始マル
十七日　大学論語輪講始マル
十八日　大学孟子
十九日　大学休ム
月　二十一日　大学礼記始マル
火　二十二日　大学哲学始マル
木　二十四日　大学孟子
九月　金二十五日　大学　礼記　孟子
＊此夕本社官校預備校ニ聘スル棚橋一郎、井上円了、織田、井上、神津ヲ饗ス

『敬宇日乗五』
明治十九年二月
二十七日　三月一日十時ニ内閣ニ礼服ニテ出閣スベキ旨内閣書記官ヨリ被達
三月　一日　任元老院議官
二日　元老院ニ出ル

以上、「井上円了」の名前が『敬宇日乗』に現れるところを含めて、敬宇が東京大学でどのような書籍を用いて教授していたか見てみた。さらに明治十九年に敬宇が東京大学教授を辞任する日付を見るために必要個所を附

記した。

敬宇は『敬宇日乗』の中で「井上円了」という略字を用いている。井上圓了の名前が記述される最初の箇所は、明治十七年九月十六日で、ここでは井上圓了が親の病気のために帰校が遅れて休んだという報告である。『井上圓了先生断片』東洋哲学第十三編第三号明治三十九年四月一日によると、「中村敬宇先生などはイツモ教場では私を相手に西洋の珍しいお話や面白いお話をされたものです」とあって、圓了の方も敬宇の講義の外に敬宇の珍しい話に耳を傾けていたようである。

講義としては敬宇は、明治十七年十月十四日に井上圓了に易の乾卦を教えたことを記している。十一月十一日には圓了に易の訟と比との項を教えており、同じく十一月十八日にも最後の学年の第四年生井上氏の課業であると書いている。また十二月二日に敬宇は大学で井上圓了に易の小畜とその彖象を教えている。十二月九日には同じく圓了に易の履と泰とを教えており、十二月十六日には敬宇はこれらの課業について試験を圓了に施している。こうして見ると、敬宇は圓了に易経を中心に教えたと言うことができる。

翌年の明治十八年二月二十日には井上圓了らが創設した哲学会において「我ハ造物主アル事ヲ信ズ」を講演していることを記しているが、これは私塾同人社の雑誌『同人社文学雑誌』第十号明治十年に掲載された敬宇の「上帝ノ必ズ有ル事ヲ論ズ」と題する小論の内容とほぼ同じであろうと推察される。

明治十八年三月一日に書かれた二つの文章は大変面白いものである。前者は、「申報」と表記されて、特に和漢文学第四年生の棚橋一郎について賛辞を呈している。棚橋は井上圓了の哲学館講師を勤めた経験もあり、圓了とは大学時代から親密な関係にあった人物である。敬宇は詩経、老子、列子を教えたが、その進歩は著しく大変満足のいく学生であると言い、進化論を卒業論文に書いたことを褒め、和洋双方の知識を兼ね備えた将来有望な

学者になろうと書いている。

他方の「漢書課ニ属スル分」では易経論語を教えた学生たちについて、いずれも皆勤勉であって鋭い質問をするので、自分も教えるための準備を十分にしておかないと、そうした質問には対応していけないと告白する文章である。ここでは「第六期生」がどのような学期制によって数えているのか不明であるが、推測するに敬宇が東京大学で漢学を教え始めてから、第六期目をさしているかもしれない。易経論語を教科目としたとあるから、この中に井上圓了も含まれると思われる。圓了の鋭い質問に屢々立ち往生した敬宇を想像することができる。

さらに三月二日に井上圓了が卒業論文に力を集中させるために敬宇の易の課業を欠席する旨敬宇に報告したことを記録しているが、敬宇は心配して教務課までこのことを届けている。敬宇の圓了への深い配慮が伺える。

また三月三十一日に井上圓了に課業の点数を与えたことを記録している。また六月二十二日に圓了に易の試験をしている記事がある。とにかく『敬宇日乗』の中で東京大学の学生のうち、大学で教えた日付のところに名前を几帳面に記録した学生は、井上圓了しかいない。

圓了が敬宇の試験を受けた最後は、明治十八年六月二十二日であり、これをもって圓了が受けた敬宇の課業は終了したのである。七月八日には、井上圓了の卒業証書に敬宇が「調印」したと書いているから、ここで圓了は『読荀子』というテーマの卒業論文を提出して、めでたく東京大学を卒業したことになる。

明治十八年九月二十五日に井上圓了は、敬宇に招待されて棚橋一郎、織田、井上、神津らと共に敬宇の同人社に招かれて饗応を受けたのである。敬宇は「本社官校預備校」と書いているが、同人社は明治二十二年九月二十八日に敬宇の手を離れて杉浦重剛、宮崎道生らの手に委ねられ、純粋な予備校になってしまうが、明治十八年にも「預備校」と書いているから、この頃からすでに予備校も併設されていたらしい。井上圓了が敬宇に招待され

たことが『圓了随筆』（十五）にも記述されている。「昔年中村敬宇翁在世の時、余之を小石川の屋敷に訪ふ」とある記事がこれである。

ところで、敬宇が圓了とともに招待した織田、井上、神津とは誰であろうか。敬宇が井上圓了の名前を一度日記に書いて、またもう一度井上の名を書いたのではないとしたら、井上とは誰であろうか。東京大学で哲学を教えていた井上哲次郎は、すでにドイツ留学中であるから東京にはおらず、従って井上哲次郎ではない。現在のところ、井上と織田は筆者には同定することができない人物である。神津は敬宇の同人社を手伝っていた神津専三郎であろう。

ところで、上記の『敬宇日乗』を見るかぎり、当時の東大教授の仕事は決して楽なものではなく、時には毎日出講しなければならなかったことがわかる。その上、同人社の経営も彼の著述の印税に頼って経営されていたこともあって、彼の大きな負担になっていた。これらの事情が重なってもともと体の弱かった敬宇は一層病気がちになった。上記の日記だけからしても彼が大学を欠席した日々はかなり多い。明治十七年九月から十二月までの日記でも、十二日間休んでいる。また明治十八年三月二十二日に喀血してその後一ヶ月と一週間余り休んでいる。

そうした健康状態のすぐれなかった敬宇にとって、特別飛び抜けた秀才の井上圓了と棚橋一郎とが一緒のクラスではなかったとしても敬宇の講義に出席していたことは、緊張を強いられたこととはいえ、また楽しみであったろうと推察される。そこで彼の『敬宇日乗』に特別彼らの名前を記述していたのではないだろうか。

敬宇はこの後明治十九年三月一日に元老員議官に勅撰されるまで東京大学で教えるが、井上圓了や棚橋一郎のように日記の中に学生の名前を表記することは殆どなく、単に書籍の題名と大学へ出勤のみを記述するだけであ

った。敬宇自身の病弱のせいもあろうし、元老院議官の話もちらほら出てきて関心がそちらに向けられたこともあろうが、他方で俊秀の井上と棚橋の卒業後では、敬宇の講座に出席した後輩の学生たちが相対的に学力の弱い人物に見えたのではないだろうか。

【注】

(1) 陽朱陰明とは表面では朱子学を主張するが、陰では陽明学を重んじている姿勢を称してこのように言われた。

(2) 中村敬宇自筆本『敬宇文稿甲寅文稿』国立国会図書館静嘉堂文庫所蔵

(3) 中村敬宇の評伝としては高橋昌郎『中村敬宇』吉川弘文館昭和四十一年に詳しい。また中村敬宇の思想に関しては、小泉仰『中村敬宇とキリスト教』北樹出版一九九一年、小泉仰「中村敬宇」小泉仰外編『日本の思想を考える』比較思想講座第二巻北樹出版一九九三年を参考にされたい。

(4) この箇所はカタカナとひらがなを交えて書いている。

(5) アスタリスク(＊)は「井上円了」の名前が出てくる箇所を指す。

この箇所で井上圓了が欠席したので、講義を休むと書いてあることは、『井上圓了先生断片』東洋哲学第十三編第三号、明治三十九年四月一日にある「私の大学にゐました頃は哲学科の学生はたツた一人で教師が十何人とありました。それでしたから私が一人欠席すると十幾人の教師が皆やすまなければならぬといふ次第……又教場で講義のときはイツモ二人きりのことですから講義かと思へば談話、談話かと思へば又講義といつたやうなもので……」というのと一致している。多分敬宇の易経の講義も圓了一人であったらしい。

(6) この文章の中の〈 〉は敬宇が間違えて「月」としたが、「年」の意味であろうという指摘の印である。また〈 〉の文章は、敬宇が一度筆で書いたが、これを彼自身が筆で消している箇所で読める範囲で筆者が判読したことを示す印である。

この箇所の文章では、敬宇が教えた生徒を複数扱いしているので、(6)の指摘とやや矛盾するが、恐らく圓了が受講した敬宇の講義は圓了一人であった可能性が高い。

（7）利によりて放（おこな）えば怨み多し。